

アントニオ・タブッキ著 和田忠彦、花本知子訳

『他人まかせの自伝——あとづけの詩学』

岩波書店 二〇一二年五月

最終的に著者は読者にこう語りかける。

こういつてよければ、わたしは他人まかせの自伝を書きました。この言い方を受け入れてくださいますか。(107)

「他人まかせの自伝」とはどういうことなのか。

本作でタブッキが明かすのは彼の創作についてである。その源泉となつてゐるのは、「声」、「亡霊」、「夢」、「印象」、「記憶」、「意志」といった形のないもので、それらの経験を書き記すことで作品が生まれる。しかし「書かれたこと」は決してその経験を再現しうるものではない。経験を経験たらしめる作者の感情や感覚は本物であっても、その再現は不可能であり、作者は何らかの表現に経験の本質を託す。

そう述べるタブッキの創作のきつかけとなるのは例えば、『レクイエム』について明かされた「声」の力である。既に亡き、病気で声を失つた父親との筆談の記憶、その記憶を「呼び覚ます」声の力を中心に、著者がポルトガル語で執筆した原因を明かすことに至る。

声と呼び覚ます亡霊や夢、記憶は、ぼやけた姿をとつてふいに著者のもとを訪れる。『ペレイラは証言する』の主人公ペレイラもその一人だ。一九九四年に出版されたこの作品で著者はある老記者の記憶を主人公に託している。ペレイラの人生を物語にする過程を簡潔に述べつつ、ひとりの登場人物が記憶や感情を集約し象徴することを著者は示す。

登場人物が意図的あるいは無意識的に振られて生を受けることもある。『遠い水平線』の主人公スピーノの「笑い」の分

現代イタリア文学を代表する作家、アントニオ・タブッキ (Antonio Tabucchi) が自作小説五作品——『レクイエム——ある幻覚——』(一九九二)、『ペレイラは証言する』(一九九四)、『遠い水平線』(一九八六)、『ポルト・ピムの女とそのほかの物語』(一九八三)、『いつも手遅れ——手紙の形をした小説——』(二〇〇二)——について語る。自作の分析でも総括でもないエッセイ。それがここに紹介する『他人まかせの自伝——あとづけの詩学』である。各作品の背景や単行本に収まりきらなかつた物語を「あとづけ」しながら、作家自ら作品に批評的な眼差しを向ける。タブッキは、読者が作品の解説なり読解のヒントなりを与えられると単純に受け取らないよう、最初からこう述べる。

自分の作品について書いたということになつてゐるけれど、それだつてほかの人の本について話すための口実にすぎない。はるか遠くを旅するとき、心の鞆のなかに、自分でも知らないうちにしのばせて持ち歩いている本の数々。(vii)

析を導入に、登場人物の人物造形が純粹にひとつの記憶の象徴足り得ない例をあげる。登場人物には、語る際の作者の勇気いかなで、元々の記憶にはあり得ないはずの他のイメージが付されることがある、と。

さらに自分の小説が真実を探すには信用に足らないことを語るために、『ポルト・ピムの女』にまつわるエピソードを紹介し、作品の映画化や舞台となった土地への旅行について述べる。著者は経験を書き留めたつもりが、書き記したがためにその書かれた経験が現実味を失い、違和感を覚える。映画化により再現されると、経験、記述、創作、現実の境界が曖昧になってしまう、書いたことと再び同じこと——実際には映画の撮影なのだが——が起こってしまうことに恐れを抱き、後悔さえしたと言う。

ここで読者の気持ちを代弁させるかのように、一人の人物「ヴァスコさん」を登場させ、問わせる。

本のなかには信用してもよい箇所だつてあるじゃないですか。(74)

彼が言わんとしているのは、作品中で作者の経験が正確に細かく記述されている箇所についてで、彼はそういう箇所では実際の経験が偽りなく書かれていてと思いたい。少なくとも作者には責任がある、と。取り調べのような会話で彼は著者に詰め寄る。著者の返答はしかし、自作は「盗んだ会話」や「模倣の模倣」、「気鋭の物語論」に拠る結末で成り立ち、独創性はない、というものだ。

他人まかせと言われても、作品には作者がいる。著者は作者についても読者を制す。書簡体小説である『いつも手遅れ——手紙の形をした小説——』をとりあげ、著者が「声の肖像」であるという手紙、ここでは返事がくることを想定していない手紙を書く行為から、テクストと自伝の関係について話す。作者の経験がどのように原稿に内包されているか。ブランシヨを引き合いに作品中に作者を探す不可能性を述べ、自分を作品の中に探さないように、と言う。

著者はさらにこう続ける。

わたしたちは往々にして、存在するものごととものごと
のあいだに正確な境界を引ききたがる。その思いが横柄であ
ることも少なくない。どこまでが「現実」でどこからが「虚
構」なのかを寸分の違いなく測ろうとする。(131)

小説の中に何かしらの真実、作品が基づくであろう作家にとつての現実や経験を探しても、書かれたものはそれらを装つた虚構である。それを表してタブッキは「他人まかせの自伝」と言った。書かれたことは確かに虚構ではある、しかし、作者の感情や感覚に基づいているという点で、全くの作りごとではない。「真」たるものを語るものが不可能であるゆえに、「偽」たるものに託してそれを語る。小説は虚構だが、読者は読むことで「現実」と「虚構」のあいだを逍遙できる。そこに文学の力をみるタブッキが、自作について語るふりをして小説への信頼を表明した本作品は、虚構の背後にある「声」「亡霊」「夢」「印象」「記憶」「意志」「感情」「感覚」といった、形のないもの、

再現不可能なものへのオマージュとも言えるだろう。

こんなことは作り話では書けることではない。作り話だ
としたら、あんまりだ。(74)

本作品を読んだ後、こう思う人もいるだろう。これは著者を
問いつめた「ヴァスコさん」の言葉である。この言葉にタブツ
キは、タブツキらしい返事をする。……

わたしは反論するのはよそうと思う。「あんまりだ」の
ところに同感だ。(74)

(石井沙和)